

## 日高真実伝 (三)

——(東京) 帝国大学最初の教育学教授——

平 田 宗 史

Munefumi Hirata

第四部 教育科

(2000年9月4日)

## 第4章 ドイツ留学時代

## 第1節 留学時代のドイツの社会と教育

日高真実は、1888(明治21)年7月から1892(明治25)年2月まで、ドイツに留学した。この時期は、ドイツ帝国時代である。ドイツ統一は、1848年の革命以来、ドイツ市民階級の念願であったけれども、それは、プロイセン王権によって進められた。具体的に言うと、プロイセンの政治的指導者である首相ビスマルクが、主導権をもって進めて行っていたのである。強力な軍隊により、1866年の普墺戦争で、ドイツ統一の競争相手であるオーストリアを破り、同国を排除して北ドイツ連邦を成立させる。さらに、1870～1871年の普仏戦争の勝利によって、南ドイツの四カ国を加えて、ドイツ帝国が成立した。ドイツ帝国は、25の邦(22の君主国, 3の自由都市)および帝国直轄領としてのエルザス・ロートリゲンからなる連邦であった。その連邦の中で、プロイセンは、面積と人口ともに、ドイツ帝国の3分の2を占めていた。したがって、プロイセンは、ドイツ帝国の中で、圧倒的な優位にあった。プロイセン王は、ドイツ皇帝を兼ね、プロイセン首相は、帝国宰相を兼ねていた。宰相の地位にあったビスマルクは、1890年までの20年間、国内政治において、独裁的力を発揮した。しかし、1889年、ルール地方で生じた大炭坑ストライキの対応をめぐる、ビスマルクは、皇帝ウィルヘルム二世と対立し、1890年、辞職した。

ビスマルクは、外交上の手腕を発揮するとともに、工業の発展にも寄与した。特に、化学、電気工業への寄与は著しく、それらの発展に貢献した。それらの発展は、目覚ましいものであった。それとともに、急速に、都市化が進行した。

ドイツの統一が進み、工業が発展するとともに、教育は、普及して行った。日高真実の留学した頃の日・独の教育の比較は、表(Ⅳ-①)の通りである。

表(Ⅳ-①) 日・独の教育比較 (1890年度)

面 積	人 口	小 学 校 数	中 学 校 数	大 学 校 数	対 学 生 数
日 本	三、八三、四四七	三、九〇六	五五校	一校	五、六五八
獨 乙 帝 國	五、四、〇五一	四、六八五	二、八六六	二、八六六	二、八六六

注 日高真実著「日本教育論 卷之下」  
明治24年4月17日 57～58頁による。

表(Ⅳ-①)によると、日本は、小学校、中学校、大学校等の数にしても、そこで学んでいる児童、生徒、学生数にしても、ドイツに遠く及ばないという。さらに、日高真実は、「学問は利器なり。独乙が此千八百年代の中頃より、大に勢力を得るにいたりしは、この利器の助によれること多きは明なり。」(2)と語り、また、「日本国に利器を作らんと欲せば、教育を盛にし、知識をひろめ、徳情を篤くし、体力を鍛練すること、実に急務なり。こどもを教導するの外、理学的知識を教授し、これを応用するの術をさづけ、教育と実業とをして、手を取りてすゝましむること、必要なり。つゝるる教授いふ、『国民の教育がなければ、邦の富はあるべからず。又此二つのものなくては、邦の力も、政治上の自由も、あることはできず』といへり。これと同じ意味のことは、この千八百年代のはじめより、学者やら、政治家やらの、大

に唱ふところなり。殊に、ふいてが、かの有名な『どいつ邦民に告る講演』の、眼目とするところも、このへんに過ぎるなり」(3)と、切言している。

以上のような教育についての考えを有していた日高真実は、ドイツのベルリン大学へ留学することとなった。ベルリン大学は、1809年8月、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世が、フンボルトの提案に応じ、創設され、翌年10月、開学された大学である。開学当時、教授陣総数58名、学生数256名であった。学長には、ハレ大学の法学教授であったシュマルツ、神学部長シュライエルマヘル、法学部長ビューナー、医学部長フーエラント、哲学部長フィヒテが就任した。教授も、当代随一と言われる人々が着任する。「素晴らしい陣容であった」という。(4)

ベルリン大学の創設は、ドイツのみならず世界の大学の進路に決定的な影響を及ぼすこととなった。それは、つぎの点にあるという。

一つは、伝統的なユニヴェルジテートの名称とその団体的原理および四学部制を保持しながら、諸学問を有機的に統一する総合大学＝ユニヴェルシタス・リテラルムとして成立させたことである。

二つは、これまで下級学部的地位にあった哲学部を、神学部、法学部、医学部と同格とし、大学が、「学術の蘊奥を研究し教授する所なり」と、確認されたことである。

三つは、「大学の自由」が、「学習の自由」を再確認し、それは、学生の転学の自由にまで及び、これまで領邦大学の色彩の濃かった大学を全ドイツ的大学として止揚したことである。すなわち、学生は、自分が学びたい大学に行き、指導を受けたい教授の下に行ける転学の自由を有するようになった。(5)

日高真実が留学した1890年頃のベルリン大学は、益々、発展し、学問的にも、ドイツの大学ばかりでなく、世界の大学をリードする大学となっていた。

日高真実が、ベルリン大学を去った翌年の『ドイツ大学年鑑』によると、ベルリン大学は、他の21のドイツの大学ばかりでなく、スイス、オーストリア諸国の大学の中でも、教授陣、学生数において、他の大学を圧倒していた。助教陣は、正教授、学外教授、名誉教授、私講師等を含めて、360名、学生数は、聴講生を含めて、6,979名である。ベルリン大学は、大学中の大学となった。

表(Ⅳ-②) ドイツ大学の統計(1892~93)

Universitäten.	Zahl der Lehrer (Winter-Semester 1892/93)						Zahl der Studierenden (Sommer-Semester 1892)									
	Ord. Professoren	Assistenten	Honor. Prof.	Privatdozenten	Spezial- u. Exercit. hörer	Gesamtzahl	Theologen		Rechtswissenschaften	Medizin, Chirurgie, Zahnheilkunde, etc.	Philosophie, Philologie, etc.	Naturwissenschaften	Gesamtzahl der Studierenden	Zuram Besuch der Universität	Gesamtzahl	
							evangel.	kathol.								
I. Deutsches Reich.																
Berlin, Universität	87	87	11	155	20	360	557	-	1150	1185	1464	4356	2623	6979	?	
" landw. Hochschule	11	18	-	-	-	29	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Bonn	61	32	1	37	4	135	107	208	323	325	434	1397	35	1432	?	
Poppelsdorf	9	12	-	-	-	21	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Braunsberg	8	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Breslau	61	29	3	40	9	142	143	211	274	292	331	1251	38	1289	?	
Erlangen	40	8	-	10	5	63	294	-	246	424	143	1071	10	1111	?	
Freiburg i.B.	45	21	4	26	3	99	-	203	342	481	279	1305	62	1367	?	
Giessen	39	14	-	11	3	67	83	-	179	172	148	573	20	593	?	
Göttingen	65	24	4	22	6	121	175	-	171	200	225	771	22	793	?	
Greifswald	42	17	-	17	7	83	297	-	64	393	67	821	11	832	?	
Halle	51	30	2	40	10	133	602	-	181	283	402	1468	78	1546	?	
Heidelberg	45	37	8	19	11	120	86	-	384	278	408	1156	136	1292	?	
Jens 9	38	29	8	14	3	85	116	-	120	212	197	645	60	705	?	
Kiel	39	19	1	22	4	85	78	-	78	335	121	612	19	631	?	
Königsberg	44	25	-	24	9	102	141	-	162	255	134	692	9	701	?	
Leipzig	64	50	12	65	4	195	468	-	988	834	814	1104	107	1321	?	
Marburg	44	16	1	25	6	92	152	-	206	266	307	904	53	957	?	
München	65	26	4	60	6	161	-	137	1400	1443	558	3538	36	3574	?	
Münster	21	13	1	6	7	48	-	265	-	-	158	423	9	432	?	
Rostock	31	8	-	4	2	45	44	-	58	138	156	396	-	396	?	
Strassburg	58	23	2	28	4	115	114	-	221	333	247	915	40	955	?	
Tübingen	51	15	1	20	7	94	392	171	439	236	96	1334	17	1351	?	
Würzburg	36	12	1	24	3	76	-	150	256	743	136	1285	118	1403	?	
II. Schweiz.																
Basel	40	24	-	23	4	91	105	-	45	146	138	434	69	503	?	
Bern, Universität	43	14	3	50	3	113	45	5	85	227	144	506	48	554	?	
Bern, Thierarzneischule	5	-	-	-	-	5	-	-	-	-	50	50	-	50	?	
Freiburg i.S.	40	-	-	-	-	40	-	81	61	-	26	168	4	172	?	
Genf	46	14	11	41	-	112	43	-	112	233	181	569	115	684	?	
Lausanne	30	27	-	12	5	74	39	-	113	101	83	336	66	402	?	
Neuchâtel	28	4	7	9	-	48	16	-	13	8	18	55	47	102	?	
Zürich	41	20	-	54	4	119	40	-	78	266	172	556	103	659	?	
III. Russ.-Ostsee-Prov.																
Dorpat	36	10	-	26	6	78	254	-	148	1017	263	1682	8	1690	?	
IV. Oesterreich-Ung.																
Ozernowitz	23	7	-	5	2	37	-	58	176	-	12	246	55	301	?	
Graz	45	23	-	34	2	104	-	122	424	477	55	1078	155	1233	?	
Innsbruck	41	19	4	18	1	83	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Prag, Deutsche Univers.	55	17	2	31	4	109	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Wien, Universität	90	45	3	166	13	317	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Wien, evangelisch-theologische Facultät	6	-	-	1	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	?	
Vien, Hochschule für Bodencultur	13	5	-	16	2	36	-	-	-	-	-	-	-	-	?	

注 Prof. Dr.F.Ascherson, Deutscher Universitäts-Kalender, Zwei und vierzigste, Winter-Semester 1892/93, S.282~283

1888(明治21)年7月3日に、ドイツ留学を命ぜられた日高真実は、その4日後の7日に東京を出発し、その翌日の8日に、横浜を出港する。その後、一路、ドイツへと向うのである。彼の手紙によると、神戸→上海→香港→サイゴン→シンガポール→コロンボー→アデン→スエズ→ポートサイド→アレキサンドリアを経て、8月20日、フランスのマジソン港に到着する。そして、東京を発って、約51日経った8月26日の午前7時40分に、ベルリンに到着する。その経緯を書いた資料は、つぎの通りである。

○在獨國會員文學士日高(真力)實氏ヨリ會員某氏ヘノ來狀中ニ日ク(前署)七月八日横濱出帆、神戸、上海、香港、柴棍、新賀坡、コロンボー、

亞典、スエズ、ポートサイド、アレキサンドリア、ニ寄港去八月二十日午前佛國馬耳塞港着一萬零二百海里ノ航海四十四日ヲ費ヤシ申候同船ニハ日本人都合十一人ニテ中々賑カナル航海ニ有之候右航海中最荒レシハ上海香港間ト亞典灣ニ入候前二日間トメスシナ海峡ヲ過キ一日半許トコノ三回ニ有之候亞典灣ニ入り候前ナドハ室中ニ有之候椅子室外ニ轉ゲ出シ候位ニ、揺レ申候暑氣ノ最甚カハリシハ香港ト紅海ニ入りテ二日間スエズ堀割ヲ通りシ時ト此三回ニ有之候印度洋ヲ航シ候節ハ日本ノ秋ノ初メ位ノ氣候ニテ夜分ナドハ夏衣ニテ冷氣ヲ覺申候右三回ノ最暑ノ節モ大抵華氏九十六七度故日本ニヲモ往々有之候暑サニ有之候二十日馬耳塞發瑞西國ニ參申候同國ゼネヴ、ベルン、バーゼル、ハ國中第二第四第三（respectively）ノ都會ニ有之候其内景色ト云ヒ繁昌ト云ヒ最備リシハ第二ゼネヴ、ニテ日本ノ山水兼備ハレル土地ニ手ヲ入レシモノト思ヘバ想像付可シベルンハ中央政府有之土地ナレモ寥々タルモノニ候第一ト申チューリヒ、ハ少々迂路ニ相成候ニ付參リ不申ソレヨリ獨國ニ入り、ハイデルベルヒ、「フランクフルト、アム、マイン、」ニ參リ申候フランクフルト、ハ獨國中ニテ金満家ノ集リ居候處ノ由ニテ中々立派ニ有之候同處ノ停車場ノ宏大美麗ナルコトハ世界第一ト申候（去八月十八日開場セシナリ）ゲーテノ生レシ家ハ古風ヲ存シテ保護致シ有之其銅像ハ、中々高尚優雅ニテ自ラ尊敬ノ念ヲ起シ申候二十五日午後七時四十五分同府發急行列車ニテ翌二十六日午前七時四十分當伯林府安着仕候伯林府ハ馬糞ノ埃紛々タル都會四十分間ニハ歩シテ一端ヨリ他ノ一端ニ達スベク Friedrich str. ト申候町ハ東京ニテ丁度日本橋通ニ當リ候町ニ有之候其廣サ小川町通位物ハ高價ナリ食物ハ美ナラズ只金ヲ捨ル様ノ心チ致シ候唯アスパルトニテ固メアル町ニテ馬車が平カニ少シモゴトゴトセズ走り候丈ハ宜シク候ヘモ五寸角位ノ石ヲ引ツメ候處凹凸極リ無ク馬車ハ非常ニゴトゴト致シ走クニハ歩キ惡シ甚之野蠻ニ有之候（下署）

到着してのベルリンに対する感想は、ベルリンは、「馬糞ノ埃紛々タル都會四十分間ニハ歩シテ一端ヨリ他ノ一端ニ達スベク」都市だという。

真実は、ベルリンに来て1ヵ月余経った10月の12日午前11時半に、ベルリン大学哲学科学生として登録したという。そして、25日よりパウルゼンの教育学の講義を、11月1日より、デーリングの講義を受講する予定であり、翌年の7～8月頃に

は、ライプチヒ大学へ転学のつもりであるという。ライプチヒ大学は、ドイツの大学において、ハイデルベルク大学に次いで、二番目に設置された大学でザクセン州のライプチヒにある。当時、教授陣の数からみると、ベルリン大学に次いで、多い。学生数にしても、3番目に多い。1年後は、ライプチヒ大学に転学の予定であるという。

○會員日高眞實氏ノ手簡 ノ中ヨリ左ノ數節ヲ譯載ス（原獨逸文）

前略小生儀當伯林ニ罷在可ナリ壯健ニ御座候御放神有之度候當地到着後獨逸語勉強仕居候所本月（十月）十二日午前十一時半ヲ以テ伯林大學科學生ニ入籍致シ今ハ書生ノ學士ニ相成申候當大學ニハ來年ノ七八月頃迄マカリ在其後ハライプチヒ大學ニ轉學ノ積ニ有之候該大學ニハマツシュース・ホフマン シュツウリユン ベルリヒテル等ノ教授員外教授アリテ各得意専門ノ教育學科ニ就テ講義有之由ニ候○獨逸語ヲ學ヒ從テ龜ノ甲文字ヲ習ヒ居候故ラテン字ヲ書クコトハ大分下手ニ相成申候尚勉メテ恢復ヲ謀リ度候○教授パウルゼン氏ノ教育學ノ講義ハ本月二十五日ヨリ「ドクトル」デーリング氏ノ講義ハ十一月一日ヨリ始リ候右二氏ノ講義ニ出席ノ覺悟ニ御座候○我帝國大學五分科大學ノ中ニ於テ文科大學最モ教授ニ欠ケ居ルカト思ハレ候現ニ歴史科ニ坪井文學士心理學社會學ニ外山教授アルノミニテ倫理學ノ教授審美學ノ教授論理學ノ教授哲學史ノ教授及博言學ノ教授ハ欠ケ居今ハ外國人ヲ以テ暫ク之ニ充ツト雖苟モ帝國大學文科大學タル以上ハ可成速ニ邦人ノ教授ヲ以テ之ニ更ヘサル可ラサルコトト被存候尤外國語ノ教師ハ例外ニ候云々

さらに、この資料で注目すべきことは、日本の帝国大学文科大学でも、「可成速ニ邦人ノ教授ヲ以テ之ニ更ヘサル可ラサルコトト被存候」と、提言していることである。帰国後、早速、帝国大学文科大学教授に任命されているので、彼の意見が受け入れたのであろうか。

注

- (1) 下中直也編『世界大百科事典』㊟平凡社 1988年4月28日 976～7頁。
- (2) 日高真実『日本教育論 卷之下』明治24年4月17日 56～57頁。
- (3) 同上書 58～59頁。

(4) 島田雄次郎『ヨーロッパの大学』至文堂  
昭和39年9月25日 157頁。

(5) 同上書 157～158頁。

(6)『学士会月報』第9号 明治21年11月20日 10～12頁。

(7)同上書 第10号 明治21年12月20日 5～6頁。  
フンボルト大学に、ベルリン大学時代の日高真実のことについて問合せたところ、次のような回答を得た。

「ベルリン大学の学籍名簿の中には、78(学長)期の3535番に1888年10月12日付で、ヒタカ・マサネという人物－宮崎生まれで、哲学部に学んだ－が記載されていました。書類の中にあるメモ、すなわち「1891年8月10日退学届け出」が<sup>3</sup>、除籍(退学)の日付として見出されます。卒業証書は請求されておらず、発行されませんでした。そのため、ヒタカが聴講した講義についての書類上の証明資料は全く存在しません。」原文は、以下の通りである。

#### HUMBOLDT-UNIVERSITÄT ZU BERLIN -UNIVERSITÄTSARCHIV-

Humboldt-Universität, Archiv, DDR-1086 Berlin, PSF 1297

Fukuoka University of Education University Library  
729 Akama, Monakata-shi

Fukuoka-ken, 811-41  
Japan

1086 Berlin PSF 1297

Ihre Zeichen Ihre Nadiridit vom Unscre Nachricht  
vom Hausruf Unscre Zeichen Datum  
14.3.89

Sehr geehrte (r?) Naoko Ishida !

Ihre Anfrage bezüglich Masane Hidaka kann von uns leider nur zum eil beantwortet werden.

In der Matrikel der Berliner Universität hat sich unter der Nr. 3535 des 78.Rektorats am 12.10.1888 ein Hitaka, Masano, geboren in Miyazaki, zum Studium an der philosophischen Fakultät eingetragenen. Der in den Unterlagen vorhandene Vermerk: "Abgang laut Anzeige: 10.8.1891" ist als Exmatrikulationsdatum anzusehen. Ein Abgangszeugnis wurde nicht angefordert und nicht ausgestellt. Somit existiert kein

schriftlicher eleg über die von Hitaka besuchten Vorlesungen.

Mit freundlichen Grüßen

Dr. W. Schultze  
Leiter des Archivs

Telefon 2030  
Telex 011 2823

Betriebsnummer 00270 400  
Bankverbindung: Staatsbank der DDR  
Konto-Nr. 6836-27-27202

この資料で注目すべきことは、日高真実が帰国直前まで、ベルリン大学に在籍したことである。ライプチヒ大学には、転学しなかったであろう。

#### 第二節 ベルリン大学留学時代の真実

先述したように、ベルリン大学は、日高真実が留学していた1890年頃、ドイツの大学ばかりでなく、ヨーロッパの大学、いや、世界の大学の中で、有数の大学となっていた。教授陣の数、学生数、留学生数等々の多さばかりでなく、学問の質においても、世界の大学をリードしていた。

前掲のフンボルト大学へ問合せの回答によると、日高真実が、どの教授の、どの講義を受けたか、記録にないという。しかし、日高真実からの来状によると、パウルゼン (Friedrich Paulsen (1846・7・16～1908・8・14) とデーリング (August Döling 1834～1912) の講義を聴講するという。

日高真実は、パウルゼンの影響を特に受けたと言われているので、パウルゼンという人物を検討してみよう。彼は、1846年7月16日、ホルシュタインのランゲホルンに生まれる。アルトナのギムナジウムを経て、エルランゲン大学に入り、はじめ神学を専攻したが、のちに哲学に転じた。そして、ベルリン大学、ボン大学、キール大学等で学び、1870年、24才で学位を得た。その後、5年間、ベルリン大学で種々の科学を研究し、1875年、ベルリン大学の講師となり、3年後の78年、員外教授(助教授)となる。ベルリン大学哲学部の正教授となることに(1)固守したパウルゼンは、なかなかならなかった。途中、ブレスラウ大学の正教授、ミュンヘン大学の正教授、1893年には、

ライプチヒ大学の正教授の話しがあったが、それも断わり、1894年4月、やっと、ベルリン大学哲学部の正教授の座に坐ることが出来た。(2) それは、48才の時、日高真実が帰国した後であった。パウルゼンは、教授会との間がうまく行かず、彼の楽しみは、「学生の前での講義であり、学生とともにやるゼミナールであり、研究であり、著述活動であった。」(3) という。

彼は、教育に関する多くの著書を残しているが、(4) 彼の教育についての考え方をみてみよう。

一つは、教育学の対象は、「児童の教育」であり、教育学は、その技術の学問で、理論的なものでなく、実際の学問であるとする。

二つは、教育学は、倫理学、心理学とともに、哲学的科学とし、その講座は、心理学、論理学、哲学史、実用哲学（教育学を組成）の三つの講座とすることである。

三つは、個人の問題から言うと、教育の任務は、「個人を単なる動物性より人性に高める事で、人間は人間の間でのみ人間となるのである。」ことである。

四つは、一方、個人は、社会全体の有用なる一員として教育されるのであって、教育学は、社会的教育学でもある。

五つは、教育学を孤立的なものと考えず、他の文化関係の学と密接不可分のものとし、倫理学、人類学、生理学、心理学、社会学、政治学等を基盤の上に、教育学を樹立しようとしたことである。すなわち、文化教育学の先駆となったことである。

六つは、教育は、先の世代が、つぎの世代へ文化財を伝達して、民族の類型として歴史的特性を維持する課題をもつものとして考えていることである。

七つは、彼は、理論的に教育学の樹立を図るとともに、プロイセンの中等教育改革運動において、古典を重視する従来のギムナジウムの卒業生ばかりでなく、実科ギムナジウム卒業生も、高等教育機関への進路の途をひらくべきだと主張し、1900年には、その実現をみた。(5)

以上のように、パウルゼンは、教育に関して、種々の主張をし、活動してきたのであるが、パウルゼンの影響が、日高真実の著書・論文、そして、活動の中に見られる。このことは、後述する通りである。

パウルゼンについて、日高真実が、ベルリン大学で講義を受けたのは、アヴスト・デーリング (A. Dözring 1834 ~ 1912) の講義である。入沢宗壽著の『近代教育思想史』(弘道館 大正3年6月23

日)によると、著書に、『哲学的幸福論』(1888年)、『教育学系統』(1894年)、『希臘哲学史』(1903年)等がある。

彼によると、デーリングは、教育について、つぎのように考えているという。

「教育は未成熟者の幸福を目的として種々の作用に役立しめるやうな成熟者の感化影響である。教育の目的は個人的快樂の動機からいへば生徒の眞の幸福に向けらるべきもので社会的快樂の動機よりすれば、社会の一員として役立つやうにすることである。併し茲に両者の目的を統合して一の統一せる目的原理を立て、手段は二の目的に相応して定めねばならぬ。」

そして、デーリングは、「科学的に教育学を立てやうとしたものであった。」という。

真実は、前述したように、1年間、ベルリン大学にいた後、ライプチヒ大学に転学し、その大学で、マッシュュース、ホフマン、シウツウリュシベル、リヒテル等の講義を受ける積りであるというが、彼等の講義を受けたか、定かでない。

注

(1) 入沢宗壽著『近代教育思想史』弘道館 大正3年6月23日 576頁。

(2) 潮木守一著『ドイツの大学』講談社学術文庫 1996年5月20日(第5刷) 276 ~ 277頁。

(3) 同上書 279頁。

(4) 主 著 Geschichte des gelehrten Unterrichts auf den deutschen Schulen und Universitäten vom Ausgang des Mittelalters bis zur Gegenwart, 2 Bde., 1885-1896. System der Ethik, 1889 (蟹江・深作・藤井訳: 倫理学大系, 1904). Einleitung in die Philosophie, 1892. Das deutsche Bildungswesen in seiner geschichtlichen Entwicklung, 1906. Pädagogik, hrsg. v. W. Kabit, 1911. Gesammelte pädagogische Abhandlungen, hrsg. v. E. Spranger, 1912.

(注、下中弥三郎編『教育学事典』(第5巻)

平凡社 昭和31年5月30日 34頁による。)

(5) 前掲書『近代教育思想史』(579 ~ 580頁)、『教育学事典』(第5巻 34頁)、さらに、『教育学辞典、第3巻』(岩波書店 昭和13年5月25日 1881 ~ 2頁)を参考にした。

(6) 549 ~ 551頁。

### 第3節 ベルリンからの便り

真実は、筆まめであったのであろう。『学士会月報』の中に、彼のベルリンからの便りが掲載されている。それは、他の会員より多い。そして、

その内容の多くは、ドイツに留学して来た日本人の動向についてである。真実は、ドイツ留学生達が集まるところに、下宿していた。

表 (Ⅳ-③) 「学士会月報」掲載の日高真実の便り

番	内 容	学士会月報
①	○「在独国会員文学士日高真氏ヨリ会員某氏へノ来状中ニ日ク」 (横浜よりベルリンまでの行程)	「学士会月報」第9号 明治21年11月20日 10～12頁。
②	○「独逸文への手紙」(日高真実より沢柳政太郎への手紙について)	同上誌 23～24頁。
③	○「会員日高真実氏ノ手簡ノ中ヨリ左ノ数節ヲ譯載ス(原独逸文)」 (日高真実の講義受講の計画)	同上誌 第10号 明治21年12月20日 5～6頁。
④	○「在伯林日高文学士ノ書簡」 (井上哲次郎の日本女子の風俗習慣についての演説、ドイツ大学生の状況、私生児について)	同上誌 第14号 明治22年4月20日 34～35頁。
⑤	○「日高真実君ノ申出」 (在外員への学士会月報送付の件)	同上誌 第17号 明治22年7月20日 41～44頁。
⑥	○「日高真実君の独逸通信」 (ドイツ留学生達の近況報告)	同上誌 第19号 明治22年9月20日 25～32頁。
⑦	○「在伯林会員日高真実氏の来簡」 (佐々木忠次郎、松本源太郎、田中館愛楠、村田謙太郎、梅謙次郎等々の友人の近況報告)	同上誌 第20号 明治22年10月20日 28～35頁。 (明治22年7月25日附)
⑧	○「拝望いたし候(日高真実)」 (友人達の転学と真実のライブヒ、プラグ大学への転学のこと。)	同上誌 第22号 明治22年12月20日 20～27頁。(明治22年8月29日夜半したむ)
⑨	○「拝望……(日高真実)」 (友人達の近況)	同上誌 第23号 明治23年1月20日 23～31頁。(明治22年9月30日したためる)
⑩	○「新年のあいさつ」 明治23年1月 ひだか まさね	同上誌 第24号 明治23年2月20日 40頁。
⑪	○「日高真実氏ノ新年状」(外山正一あて) 明治23年1月1日	同上誌 第25号 明治23年3月20日 24頁。
⑫	○「在独日高真実氏の来状」 (嘉納治五郎のこと、学術講談会のこと、等)	同上誌 第27号 明治23年5月20日 27～29頁。(明治23年3月13日づけ)
⑬	○「日高真実氏の来簡」 (一木喜徳郎のこと、ベルリンでの学士会のこと、結婚のこと、等)	同上誌 第30号 明治23年8月20日 32～39頁。
⑭	○「在伯林日高文学士よりの来状」 (三人の日高(学士)、嘉納治五郎等のこと)	同上誌 第31号 明治23年9月20日 26～32頁。(明治23年7月31日否8月1日午前1時べるりにて、ひだかまさね)
⑮	○「新年のあいさつ」	同上誌 第35号 明治24年1月20日 39頁。
⑯	○「在伯林日高文学士の来状」 (田中館愛楠、一木喜徳郎等のこと)	同上誌 第39号 明治24年5月20日 26～29頁。

ベルリンへ、1889(明治22)年12月末に来た嘉

納治五郎は、「早速フリードリヒ駅からほど遠からぬチーゲル街に一室を借りて、そこに居を定め、翌年の七月まで滞在した」(1)という。その彼も、しばしば、下宿を訪れたと、語っている。

「自分の住んでいるところからほど遠からぬところに、アルチレリー街というまちがある。ここには有名なる日本婆さんと称せられておったフォンラゲルストローム夫人が各国人と共に日本人をば親切に取扱ってくれたのである。はやく故人となつた物理学者の北尾次郎氏、同じく物理学者としてまた音楽に造詣深き田中正平氏のごとき人々は、この日本婆さんにことに世話になつたのである。当時そこには日本人が多く居たので、つい日本人の集会所のような観を呈しておつた。田中正平氏はもちろん、日高真実氏のごときも、ここに宿をとつていて、他の日本人らがしばしばここに会合した。日高氏は鰻の料理が上手で、おりおり氏の料理で鰻をたべに行つた。この家では日本風の飯もたき、胡瓜の漬物なども作るという日本風の料理が出来たので、自分らもしばしばここへに行つたものである。」(2)

真実は、つぎのように言っている。

「嘉納文学士は、住処は異なれど、間が一町もなき所、殊に、毎日食事は、小生の宿処にきてせらるゝ事故、同宿も同じことなり、時々話にみがいと、朝方までやらかすことあり、先頃は五時半に及びたり、坪井熊文学士も、随分朝まで話す人だが、大体五時が限りき、嘉納文学士は、五時半、これにはかのうものはない。この学士は、四月か五月まで、当地の留まるゝならん」(3)

真実は、「日本婆一サン Frau V. Løgerstrøm」(4)の家に、下宿していた。彼は、ベルリン大学から他の大学へ転学することを述べているけれども、留学中、ここに、下宿していたのであろう。ここで得た情報を下に、学士会月報に投稿したのであろう。

真実は、来客の応対だけに時間を費やしたのではない。友人の間で勉強家、努力家として通っていた真実は、講義の聴講、研究に従事したのは言うまでもない。

彼は、1891(明治24)年8月10日、ベルリン大学に退学届を出し、帰国するまでの詳細は分からないが、仏一英一米を経て、1892(明治25)年2月、3年半ぶりに、東京に着いた。

注

(1)財団法人講道館監修 『嘉納治五郎大系 第10巻 自伝・回顧』 本の友社 1989年10月25日 (3版) 215頁。

日高真実によると、嘉納治五郎は、1889（明治22）年12月31日と、「去年の末も末」に、ベルリンに到着したという。真実が、駅まで迎えに行くと約束していたが、「家傳の朝寝で、しくじりへ、部屋の戸をたたく音で、目がさむれば、臥床の前にあらはれ出たる武智光秀は、即ち嘉納文学士なりき」という。（『学士会月報』 第27号 明治23年5月20日 27頁。）

(2) 同上書 216 頁。

(3) 『学士会月報』 第27号 明治23年5月20日 28頁。

(4) 同上誌 第9号 明治21年11月20日 23～24 頁。